

南から来た**火山**の贈りもの

伊豆半島ジオパーク



エリア拡大申請

伊豆半島ジオパーク推進協議会

目 次

1. 拡大地域の概要	1
1-1 位置と行政区分	1
1-2 人口	1
2. 拡大を求める理由	2
2-1 拡大申請にいたる経緯	2
2-2 拡大により期待される事	2
3. 拡大後の運営組織・体制	3
3-1 運営組織	3
3-2 体制・役割分担	4
3-3 事業計画と予算	4
4. 拡大地域のジオサイト・各種自然・文化遺産の概要	5
4-1 ジオサイト	5
4-2 自然遺産	10
4-3 文化遺産	11
5. 拡大地域のジオストーリー・及びそれと全体ストーリーとの関係	11
5-1 拡大地域のジオストーリー	11
5-2 全体ストーリーとの関係	12
6. 拡大地域の地域住民のジオパーク活動参加の状況と今後の計画	12
6-1 エリア拡大準備のための活動	12
6-2 拡大予定エリアにおける普及活動	12
6-3 今後の展望	13

1. 拡大地域の概要

1-1 位置と行政区分

拡大申請を行うエリアを図1に示す。

当該エリアは、静岡県駿東郡長泉町と清水町の2町にまたがる範囲である。

両町は、伊豆半島の付け根に位置し、伊豆半島ジオパークの構成市町の中でも人口の多い沼津市と三島市に隣接するとともに、国道一号線や新東名高速道路のインターチェンジなどが位置する交通の要衝でもある。

面積は、長泉町 26.51 km²、清水町 8.84 km²の計 35.35 km²であり、現状エリアの約 2.28%である。エリアの拡大にともない伊豆半島ジオパークの総面積は、約 1,585 km²となる。

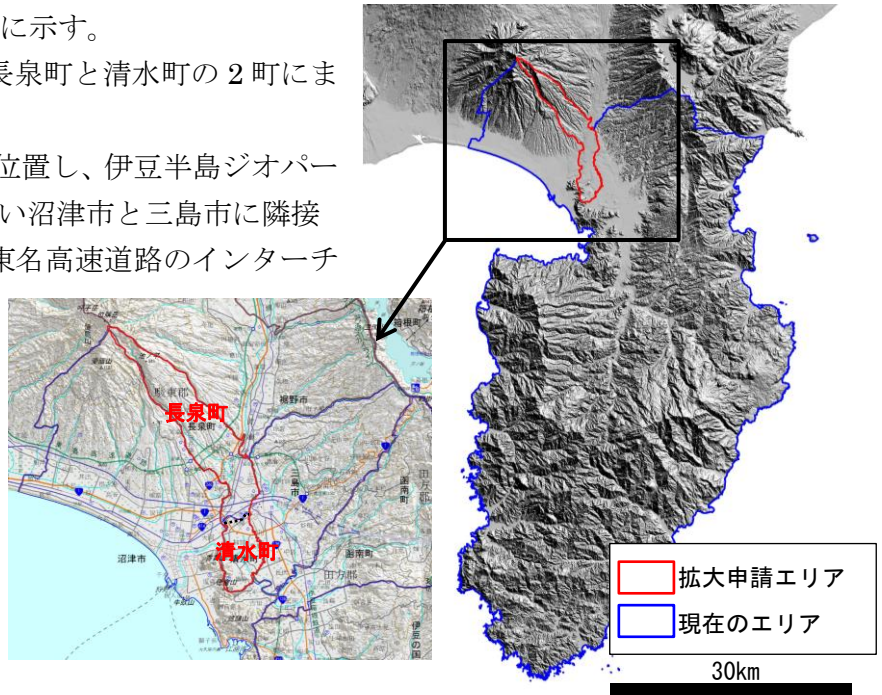


図1 拡大申請エリアの位置

1-2 人口

拡大エリア内の人口を示す。

地域名	人口 (人)	世帯数 (世帯)
長泉町	40,763	15,512
清水町	32,302	12,180
計	73,065	27,692

今回新たに追加するエリアの人口総数は、約 7 万人、世帯数は約 3 万世帯である。長泉町の人口は、2005 年からわずかではあるが増加傾向にあり、清水町についてはほぼ横ばいの状況である。

エリアの拡大にともない伊豆半島ジオパークエリア内 15 市町の人口総数は、約 69 万人、世帯数は約 28 万世帯となる。

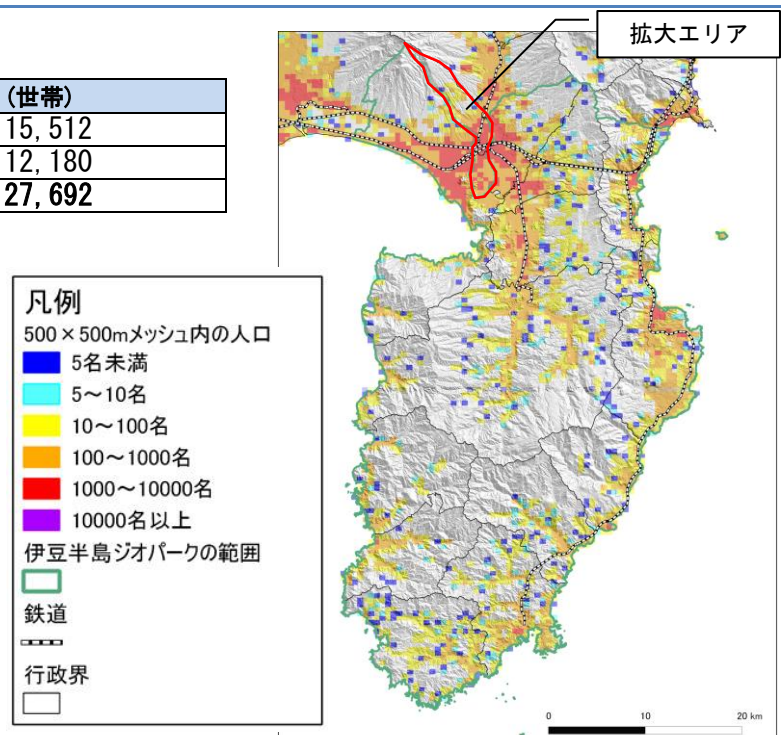


図2 地域内の人口と人口分布 (2010年国勢調査)

2. 拡大を求める理由

2-1 拡大申請にいたる経緯

伊豆半島ジオパークは、伊豆半島地域の自治体長による6市6町首長会議において構想され、その後、沼津市を含む7市6町と関係機関を含めた推進協議会が立ち上がり活動が始まった。一方で、長泉町・清水町では富士山の世界遺産登録に向けた活動が行われていたこともあり、推進協議会立ち上げ時点では参加を見送った。このため、ジオパークエリアの全体形状としては、伊豆半島北部を南北に流れる狩野川の一部や、三島～清水町に分布する湧水群の一部が不足していた。拡大エリア内のジオサイトは、立ち上げ当初の行動指針である「伊豆半島ジオパーク構想指針書」では「参考サイト」とされており、非公式な形（ジオパークのエリア外ではあるが連続したジオストーリーで語るができる場所）でジオツアーやガイド養成等に活用されていた。

このような状況のなか、伊豆半島ジオパークの活動の広がりを受け、現在のジオパークエリア、拡大エリア双方の地域住民間でもジオパーク活動への参加の機運が高まり、推進協議会会員や、拡大申請を行うエリア内の行政を動かす原動力となった。平成25年3月に長泉町長が伊豆半島ジオパークに参加する事に合意、同年5月の幹事会および総会を経て正式に推進協議会への参加が承認された。また、平成25年9月には清水町長が参加する事に合意、同年10月の幹事会で推進協議会への参加が承認された。

今回、拡大申請エリアの自治体の推進協議会への参加が決定したことをうけ、ジオパークのエリア拡大申請を行うものである。

表1 エリア拡大申請に至る経緯

年 月	内 容
平成22年 2月	伊豆半島6市6町首長会議で伊豆半島ジオパーク構想の推進を合意
平成23年 1月	沼津市を含む7市6町首長会議において協議会の設立を承認
3月	伊豆半島ジオパーク推進協議会設立
4月	事務局開設
平成24年 3月	伊豆半島ジオパーク 日本ジオパークネットワークへ加盟申請
9月	伊豆半島ジオパーク 日本ジオパークネットワークへ加盟
平成25年 5月	長泉町が伊豆半島ジオパーク推進協議会に参加
9月	清水町が伊豆半島ジオパーク推進協議会に参加
平成25年10月	エリア拡大申請

2-2 拡大により期待される事

エリアの拡大により、指針書で構想された当初のテーマが補完され、一貫したストーリー作りが可能になる。これまで「参考サイト」として取り扱われていたジオサイトが位置する地域をジオパークエリアとすることで、ジオツアーや関連機関の連携をより円滑に行うことができるようになることが期待される。なお、拡大地域のジオストーリーおよび全体テーマとの関連については「5. 拡大地域のジオストーリー・及びそれと全体ストーリーとの関係」にて詳述する。

また、長泉町は、東名高速道路及び新東名高速道路が町内を貫通し、新東名「長泉沼津IC」からは伊豆半島に向けて東駿河



図3 伊豆半島内の主要道路網 (建設中のものを含む)

国土交通省沼津河川国道事務所webサイトより

湾環状道路（伊豆縦貫道路の一部）が接続している。現在建設中の伊豆縦貫道路は伊豆半島中央部を通過し伊豆南部の下田市まで延長される予定である（図3）。清水町は町の中心部を国道一号線が通過し、国道のすぐ近くが柿田川（後述）の起点となっている。加えて、両町とも東海道新幹線三島駅に近い。東海道沿いの交通の要衝地にある両町にビジターセンターが設置されれば、伊豆の玄関口としての情報発信の効果が大きいと期待できる。

さらに、商工業が盛んで人口が減少していない地域であり、首都圏のベッドタウンでもあることから、本地域にジオパークの活動が根付けば、伊豆半島全域のジオパーク活動を支える人的資源の確保のみならず、ジオパーク全体の普及にも貢献できると期待される。

3. 拡大後の運営組織・体制

3-1 運営組織

2013年10月現在、伊豆半島ジオパーク推進協議会は、拡大エリアの長泉町と清水町を含む15市町と、静岡県、静岡県道路公社、交通事業者、ケーブルテレビ局、金融機関、観光協会、国の出先機関、地元大学、教育機関、NPO法人から成る54団体で活動をしている。

伊豆半島ジオパーク推進協議会メンバー（2013年10月現在） ---

※赤文字は拡大エリア内の自治体。下線はJGN認定申（2012年4月）以降に新たに参加した団体。

県

静岡県

市町

沼津市、熱海市、三島市、伊東市、下田市、伊豆市、伊豆の国市、東伊豆町、河津町、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、函南町、長泉町、清水町

観光関連団体

伊豆観光推進協議会

市町推薦団体

沼津商工会議所、NPO法人沼津観光協会、熱海市観光協会、(社)三島市観光協会、三島市ふるさとガイドの会、NPO法人まちこん伊東、(社)伊東観光協会、(社)下田市観光協会、下田市商工会議所、天城自然ガイドクラブ、静岡県立伊豆総合高校、(社)伊豆の国市観光協会、東伊豆町商工会、東伊豆町観光協会、河津町商工会、南伊豆町商工会、南伊豆町観光協会、松崎町観光協会、西伊豆町商工会、西伊豆町観光協会、函南町観光協会

その他団体

(社)三島建設業協会、(社)下田建設業協会、伊豆急行株式会社、伊豆箱根鉄道株式会社、伊豆箱根バス株式会社、東海自動車株式会社、静岡県タクシー協会伊豆部会、静岡県道路公社、株式会社静岡銀行、株式会社伊豆急ケーブルネットワーク、株式会社伊豆バス

研究機関

静岡大学防災総合センター

国の機関

環境省箱根自然環境センター、国土交通省沼津河川国道事務所、林野庁伊豆森林管理署、静岡地方気象台

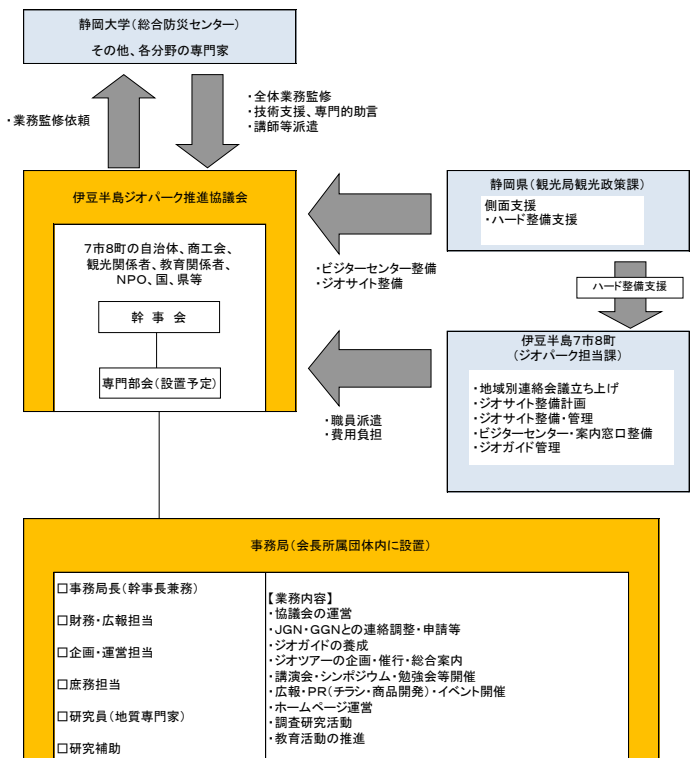


図1 協議会組織と各機関の役割

3-2 体制・役割分担

推進協議会では、年度計画・予算の策定、重要案件の協議を行っている。推進協議会には、実務担当者で構成される幹事会を置き、具体的な方策を策定・実行するための協議の場としている。長泉町及び清水町についても幹事会のメンバーとして、具体的な方策の意思決定・実行に関わる。

推進協議会の運営及びジオパーク活動全体の管理は事務局が行う。事務局は、現在 5 名の職員（うち 1 名は地質専門家）から構成され、伊東市役所内に設置されている。

エリア拡大申請にあたって、これまでの推進協議会全体の体制・役割分担については、長泉町・清水町の 2 町がこれに加わるのみで、変更はない。

ジオガイドの養成については、当初は推進協議会事務局が直接運営していたが、現在は伊豆半島ジオガイド協会（2012 年 8 月発足）に運営を委託して実施している。伊豆半島ジオガイド協会は、伊豆半島ジオパークの認定ジオガイドで構成される団体で、ガイド養成講座の運営だけでなく、ガイドのスキルアップ講座の実施、全国大会や研修会への参加など、精力的な活動を続けている。2013 年 7 月には長泉町の鮎壺の滝と割狐塚稲荷神社（後述）をコースに入れて、認定ジオガイドのスキルアップ講座を実施した。また、今年度実施しているジオガイド養成講座には、長泉町・清水町からも受講者が参加している。

3-3 事業計画と予算

推進協議会設立に先立つ平成 23 年 1 月、静岡県が静岡大学総合防災センターの小山真人教授に執筆・監修を依頼していた「伊豆半島ジオパーク構想指針書」（以下「指針書」）が完成し、推進協議会では同年 3 月の設立総会で基本的に同指針書に沿った形でジオパークを推進していくことで合意した。

中・長期計画についても同指針書に記載されており、現在は長期計画中の第 3 期（世界ジオパーク認定まで）に該当し、これに基づき住民への普及啓発活動、ガイド養成、ジオサイトの整備、学校教育との連携、ガイドツアーの拡充などが行われている。

一方、指針書策定から約 3 年が経過していることを踏まえ、関係者へのヒアリングやワークショップにより現状把握を行ったうえで、年度内を目途に「基本計画及び行動計画」を策定中である。また、活動関係者及び住民の意識が一丸となるよう、配布用のダイジェスト版も作成する。

また、予算については、平成 23 年度から協議会運営のため、構成市町と会員団体からの会費のほか、協議会運営に係る県補助金、緊急雇用創出事業による受託金などからなる約 30,000 千円の事業費が設定され、総会の決定に基づき執行をしている。来年度も約 30,000 千円程度の予算を予定している。

表 2 伊豆半島ジオパーク推進協議会の予算額推移

（単位：千円）

	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
予算規模	33,759	30,000	38,747

なお、遊歩道整備や解説看板の設置などのジオサイトの施設整備については市町が行うこととなっているため、各市町は県の観光施設整備事業費補助金などを活用して遊歩道や解説板などの整備を行っている。世界ジオパークネットワークへの加盟をめざし、ジオサイトにおける施設整備（解説板、遊歩道、トイレ、駐車場等の便益施設等）を対象に、時限的に平成 24 年度から 25

年度にかけての2か年の間、補助率の嵩上げ（嵩上げ後 1/2～2/3）が実施されている。平成26年度以降の嵩上げ継続については、協議会から要望活動を行っており、県担当部局が財政当局と調整中である。

4. 拡大地域のジオサイト・各種自然・文化遺産の概要

4-1 ジオサイト

2011年の伊豆半島ジオパーク構想の立ち上げ時には、指針書で提案されたジオサイトをベースに、会員団体の幹事会で検討の上、立ち上げ時点におけるジオサイトを設定した。指針書には「参考サイト」として今回拡大申請を行うエリア内のジオサイトも示されており、当初から同一のジオストーリーの中でジオサイトを取り扱えるよう、考慮されていた。指針書で「参考サイト」とされていたいくつかのジオサイトは、現在のジオサイトとあわせてジオガイド養成講座やジオツアーで既に活用されている。

今回のエリア拡大申請にあたり、指針書で提案されていたジオサイトとあわせ、拡大エリア内の行政担当者・教育委員会・観光協会との協議を経て、7ジオサイト・14ジオポイントを拡大エリア内のジオサイトに設定した（図4）。これらのジオサイト/ポイント追加により、伊豆半島ジオパーク全体では、114ジオサイト・315ジオポイントとなる。



図4 拡大エリア内のジオサイト

以下に、拡大エリア内のジオサイトの概要を記す。

鮎壺の滝ジオサイト

鮎壺の滝ジオサイトは、約1万年前の富士山噴火による三島溶岩と、溶岩やその地形を利用した文化遺産が見どころ。これまでのジオパークエリア内でも、この三島溶岩に涵養された地下水を利用した特産品や、田方平野北部での利水/治水などをジオのストーリーとしてきたが、三島溶岩の断面を観察できるジオサイトが存在しなかった。本ジオサイトを設定することで、このようなジオストーリーをより説得力をもって伝えることが可能となる。

鮎壺の滝（あゆつぼのたき）

一般向けジオポイント。三島溶岩の南西端部にかかる滝で見られる溶岩の断面と溶岩樹型。静岡県指定天然記念物。



割狐塚稲荷神社（わりこづかいなりじんじゃ）

一般向けジオポイント。三島溶岩の溶岩塚とその地形を利用した稲荷神社。



原分古墳（はらぶんこふん）

一般向けジオポイント。古墳時代後期の古墳で、その石室は静岡県東部地域で最大規模の大きさ。石室は富士山系の溶岩をはじめとする黄瀬川に運搬されてきた礫で、石室におさめられた石棺は、伊豆半島が海底火山だった頃の火山噴出物（白浜層群の凝灰岩）で作られている。



長久保ジオサイト

長久保ジオポイントは、鮎壺の滝上流の黄瀬川河床に露出する三島溶岩が主な見どころである。また、長久保城址（後述）は黄瀬川と桃沢川を天然の堀として利用した城跡で、古くは鎌倉時代から、伊豆半島北部地域を含む歴史の舞台にもなった。本ジオサイト内の鎧ヶ淵、牛ヶ淵には、それぞれ長久保城での戦いにまつわる民話が残っている。

鎧ヶ淵（よろいがふち）

一般向けジオポイント。三島溶岩のフローユニット境界にかかる滝。



牛ヶ淵（うしがふち）

一般向けジオポイント。三島溶岩のフローユニット境界にかかる滝。



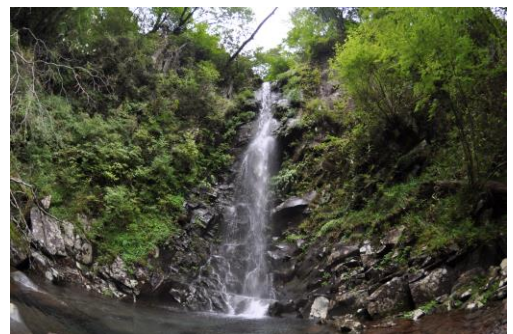
桃沢川ジオサイト

拡大エリアの北半分を占める愛鷹火山は、約 10 万年前頃まで活動していた第四紀火山である。山体は稜線まで伸びる深い谷により開析がすすみ、火山体内部が比較的良好に観察できる。また、伊豆半島北部の田方平野を覆う扇状地の土砂供給減のひとつでもある。

桃沢川ジオサイトは愛鷹山南東麓を深く浸食する谷に沿ったジオサイトで、谷の両岸には愛鷹山の新規噴出物が分布し、広い谷底平野では特産の四ツ溝柿が栽培されている。

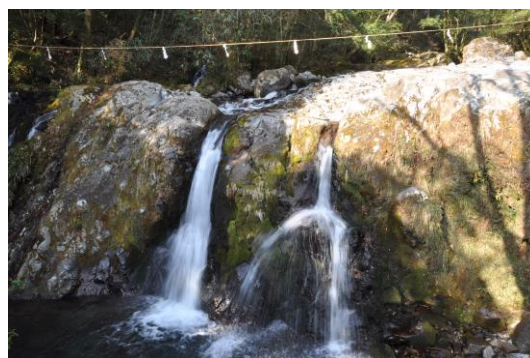
つるべ落としの滝（つるべおとしのたき）

一般向けジオポイント。板状節理の発達した愛鷹山の溶岩にかかる滝。つるべ落としの滝に至る遊歩道では、同様の板状節理や、溶岩の上面を溪流が穿った滑沢(千じょう岩)など、安山岩質の厚い溶岩流がつくる地形や構造を楽しむことができる



水神社（すいじんじゃ）

一般向けジオポイント。水神社は桃沢川の源流にあたる水源地で、水源を祀る水神社が座している。つるべ落としの滝へ向かう林道の起点でもある。



谷津の湧水（やとのゆうすい）

学習向けジオポイント。愛鷹山山麓の遊水地のひとつ。長泉町児童生徒自然観察園にも設定されており、自然観察の場として地元の学校教育に利用されている。

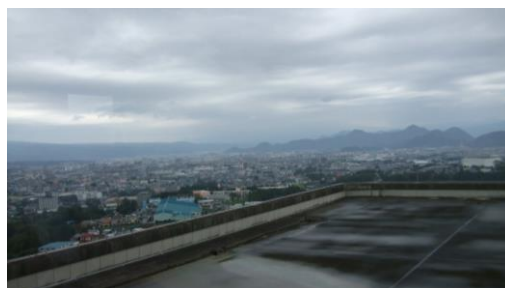


駿河平ジオサイト

伊豆半島の北部に位置する愛鷹山山麓部は、火山地質や地形を観察できるほか、田方平野をはさみ、伊豆の地形を概観できる地形観察適地でもある。

駿河平（するがだいら）

一般向けジオポイント。ゆるやかな火山麓扇状地からはさぎるものなく伊豆半島中央部の山々や駿河湾の一部を一望することができ、伊豆半島の大地のなりたちやその地形を概観できるジオサイトである。



窪の湧水ジオサイト

窪の湧水は、黄瀬川の扇状地周辺に分布する湧水群のひとつ。

窪の湧水（くぼのゆうすい）

一般向けジオポイント。三島溶岩に関連した富士山系の湧水のほか、約2800年前に発生した富士山の山体崩壊（御殿場岩なだれ）に伴う泥流（御殿場泥流）堆積物の露頭も観察できる。



柿田川ジオサイト

約1万年前の富士山の噴火で噴出した溶岩流（三島溶岩）は、愛鷹山と箱根に挟まれた谷を流下し、伊豆半島の北部に到達した。この溶岩は大量の地下水を涵養し、溶岩の末端部にあたる地域に湧水群を形成している。この湧水は特産品の製造や田方平野の農業用水、市民の憩いの場として、多くの恵みをもたらしている。この湧水群の中で最大のものは拡大エリア内に位置する柿田川の湧水である。富士山の総湧出量（約500万トン）の2割以上にあたる1日約120万トンのこの湧水は、柿田川として1.2kmほどの距離を流れ、狩野川に接続する。

柿田川（かきたがわ）

柿田川の湧水地は柿田川公園として整備されている。公園内の多数の「湧き間」では豊富な湧水が見られ、水辺にはミシマバイカモやさまざまなトンボなどの貴重な生態系を観察することができる。また、この「湧き間」では、地中にある約3200年前のカワゴ平（伊豆市）噴火の軽石が地下水とともに巻き上げられている様子も確認できる。



本城山（ほんじょうやま）

本城山は柿田川と狩野川の合流点の南側に位置する。標高76mの山頂には展望台が設置され、伊豆と本州の衝突に伴う大地形や三島～柿田川の湧水群を作り出した扇状地の景観を一望できる。

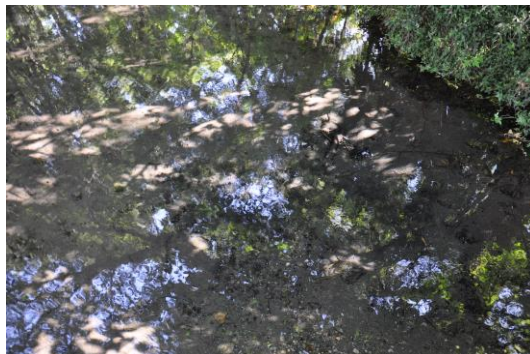


清住緑地・丸池ジオサイト（三島市/清水町）

清住緑地・丸池ジオサイトは三島～柿田川の湧水群のひとつで、三島溶岩に関連した湧水のほか、水辺の生態系を楽しめるとともに、湧水の農業利用などについて学ぶことができる。

清住緑地（きよずみりょくち）

市街地に位置する湧水地。周辺は地域住民・NPO・行政などの協働により親水公園として整備され、ミシマバイカモをはじめとした水辺の生態系が維持されている。



丸池（まるいけ）

清住緑地に隣接した丸池は周辺地域に農業用水を灌漑するためのため池。



4-2 自然環境の概要

拡大エリアの両町は、伊豆半島の北西部に位置し、年平均気温は15～17℃の温暖な気候である。

この地域では、約1万年前の富士山の噴火による溶岩（三島溶岩流）の痕跡をいたる所で見ることが出来る。三島溶岩流をつたって富士山の雪解け水が伏流し地下水となって湧き出ている「柿田川」は、国指定の天然記念物に指定されている。大量の湧水は富士山周辺の湧水の中でも最大で、水質もきわめてよく、静岡県東部地域の飲料水・工業用水として大切な水源となっている。また、水温は一年を通して15℃と一定を保っており、流域には豊かな自然環境をつくり、「ミシマバイカモ」や「カワセミ」、「アオハダトンボ」など貴重な生態系を維持している。三島溶岩の断面を観察することができる「鮎壺の滝」は静岡県の天然記念物に指定されている。

また、拡大エリアの北部に位置する愛鷹山の上部から狩野川の支流である黄瀬川沿いの低地まで約1,370mの標高差があり、冷涼な気候に生育す



る山地性の植物から温暖な気候に生育する植物まで、様々な植物が分布する。火山噴出物による種の変成、隔離による分化、海洋性気候への適応により生まれたとされる植物群の「アシタカツツジ」や「マメザクラ」「オトメアオイ」などが見られる。

4-3 文化資源の概要

長泉町および清水町地域は、東海道の三島宿・沼津宿の中間に位置し古くから交通の要衝であった。さらに遡れば、愛鷹山麓では旧石器時代の石器や縄文時代の土器などが出土しているほか、本城山北側では縄文時代終末期から弥生時代の集落遺跡（矢崎遺跡）も発見されている。中世には、伊豆国・駿河国の境界の地として、領土を巡る争いが繰り広げられ、小田原北条氏が国境を守る城として築いたとされる戸倉城（本城山）、小田原攻めの際に徳川家康が豊臣秀吉を招いて軍議を行ったとされる長久保城、江戸幕府成立後、徳川家康が隠居城として設計計画をしたが果たせなかった泉頭城（柿田川公園）など、多くの歴史の舞台となった地域でもある。



本城山公園から柿田川（右奥）を望む。
右手前が狩野川との合流点

5. 拡大地域のジオストーリー・及びそれと全体ストーリーとの関係

5-1 拡大地域のジオストーリー

拡大申請エリアは衝突体としての伊豆ブロック上に位置する一方、伊豆と本州の境界部分に形成された愛鷹山や富士山等の火山の影響を強く受けている地域である。

伊豆半島北部を南から北に流れる狩野川は伊豆半島最大の平野である田方平野を形成している。一方、この田方平野の北部には愛鷹山や富士山から供給される土砂や溶岩流による扇状地（黄瀬川扇状地）が張り出しているため狩野川下流部が狭窄部となり、たびたび洪水被害などを出し、古くから治水の取り組みが行われてきた。

狩野川は物資を運搬するための舟運路としても用いられ、伊豆石や年貢米、天城山で伐り出された木材などの運び出しに利用されてきた。江戸末期には葎山反射炉の原料が石見（島根県）から狩野川を通過して運びこまれた。現在はこうした物流は行われていないが、川辺の環境を楽しむための各種アクティ

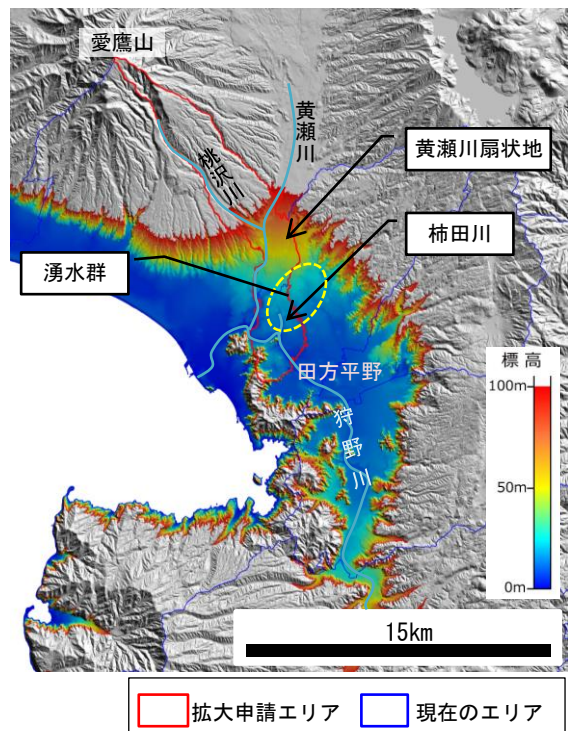


図5 黄瀬川扇状地・狩野川・田方平野
および湧水群の関係
扇状地の地形を示すため、標高100mまでを着色した。

ビティの場や鮎釣りのメッカとして親しまれている。

これまでのジオパークのエリアには、狩野川や黄瀬川扇状地の一部が含まれていなかったが、今回申請するエリアを加えることで、狩野川の上流から下流までを語るストーリーを構築することができるようになる。狩野川に接続する黄瀬川の河岸段丘や、流路変遷に伴う土地利用の変化も見どころである。

また、黄瀬川扇状地内および末端部では、愛鷹山と箱根に挟まれた谷を流下してきた富士山の溶岩流（三島溶岩）内に伏流していた地下水が湧水群を形成しており、豊富な湧水は特産品の製造や田方平野における農業に利用されるとともに、豊かな生態系を育んでいる。

5-2 全体ストーリーとの関係

伊豆半島ジオパークでは、フィリピン海プレートの北上に伴う伊豆ブロックと本州の衝突を「南から来た火山の贈りもの」として大きなストーリーを構築している。さらに（１）本州に衝突した南洋の火山島、（２）海底火山群としてのルーツ、（３）陸化後に並び立つ大型火山群、（４）生きている伊豆の大地、（５）変動する大地とともに生きてきた人々の知恵と文化、をサブテーマとし、各ジオサイトではこれらのテーマ/サブテーマを組み合わせるストーリーを作っている。

拡大エリアは、これらのテーマを決定した段階で、既に「参考サイト」として取り扱われていたジオサイトを含む地域である。今回追加する 7 つのジオサイトは、伊豆半島の土台である海底火山時代の地層（白浜層群・湯ヶ島層群）を覆う第四紀の陸上火山の噴出物と湧水、それらの上に成り立つ土地利用・歴史文化を取り扱うサイトで、「（３）陸化後に並び立つ大型火山群」および「（５）変動する大地とともに生きてきた人々の知恵と文化」に含まれる。

したがって、テーマやストーリーの追加や変更は不要である。

6. 拡大地域の地域住民のジオパーク活動参加の状況と今後の計画

6-1 エリア拡大準備のための活動

現在の伊豆半島ジオパークエリアと拡大エリアの境界部に位置する鮎壺の滝公園には、2013年3月に解説版が設置されるとともに、この解説版も用いた、認定ジオガイドのためのスキルアップ講座も行われてきた。

また、拡大エリアに含まれる柿田川は、既にジオガイド養成講座の野外講習やジオツアー等に活用されている。

6-2 拡大予定エリアにおける普及活動

長泉町では2013年10月19日に学術顧問の静岡大学小山真人教授を迎え地域勉強会を開催した。小学生から70歳代の高齢者を含む35名が参加し、伊豆半島ジオパークについて講義を受けた後、主要なジオサイトである鮎壺の滝、割狐塚稲荷神社、駿河平の現地見学を実施した。参加者の中には、2013年度ジオガイド養成講座の受講生も2名含まれており、今後地域の活動の核となる人材になることが期待される。参



加者からは「この講座で、あらためて自分の住んでいる土地を見つめなおすことができた」「火山の恵みを受けていることがわかった」などの声が聞かれた。

清水町では、2008年に清水町観光ボランティアの会が発足し、観光客に対して自然、歴史、文化などの地域の魅力を伝えている。2013年には同会から1名がジオガイド養成講座に参加している。今年度中に長泉町と同様の地域勉強会を実施する予定である。また、伊豆半島ジオガイド養成講座では、初年度の2011年度から毎年、ジオの恵みがわかりやすく伝わる場所として柿田川を野外実習のコースに組み入れている。



長泉町地域勉強会の様子

6-3 今後の展望

長泉町については、地域勉強会の開催やジオサイトの選定にあたり、観光交流協会や教育委員会も参加し、協議会協議を進めてきた。伊豆半島ジオパークでは今後、地元小中学校とも連携した教育的な活動も視野に入れた活動をより推進していく予定である。

清水町の柿田川には、約40年前までさかのぼることができる自然保護活動がある。その過程で、1988年には「柿田川緑のトラスト委員会」（現：公益財団法人 柿田川緑のトラスト）が発足したが、この活動は全国のナショナルトラスト運動の先駆である。今後は、柿田川緑のトラストと交流を図ることで、伊豆半島地域の環境保全活動が深化されるとともに、ジオパークネットワークに対し環境回復の取り組みについて先進的な事例を提供することが期待される。

拡大エリアが伊豆半島ジオパークの区域に加わることで、これまでジオパークのエリアに含まれていなかった狩野川の一部がエリア内に含まれることになり、狩野川上流から下流まで連続性のあるジオストーリーを作ることができ、地域の一体性が生まれることが期待される。さらに、伊豆半島のつけ根に位置する両町に今後、ビジターセンターが設けられることで、伊豆の玄関口（エントランス）における情報発信機能がより一層強化される。

参考文献（日本ジオパークネットワーク加盟申請書添付の参考文献リストに無いもの）

- 小川賢之輔（1972）：富士火山三島溶岩流末端付近の溶岩塚群，静岡地学，23，40-51
国土交通省（2010）：中部地方の古地理に関する調査業務報告書（狩野川・安倍川・大井川）
小山真人（2013）：富士山 大自然への道案内，岩波新書
高橋豊（1980）：黄瀬川扇状地とその形成過程，静岡地学，41号，4-13
土隆一・吉岡龍馬（1985）：富士山三島溶岩の構造と地下水. 土隆一（編），三島市小浜池保存調査に関する報告書，三島市，81-98
宮地直道（1988）：新富士火山の活動史，地質学雑誌，94，6，433-452
由井将雄・藤井敏嗣（1989）：愛鷹火山の地質，地震研究所彙報，64，347-389